

---

# 意気地無し先輩との珍妙な日々

紺とすん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

意気地無し先輩との珍妙な日々

### 【Nコード】

N5988X

### 【作者名】

紺とすん

### 【あらすじ】

目の前で愛についてのゴタクを並べるこの人は、数週間前にわたしの長年の思いを木っ端微塵に粉碎した人だった。「はいはい、よく聞いとけ。愛というのはつまり、執着なのだ」「・・・先輩、黙ってください」今頃いったい、何しに来たのか。意気地無しで口だけ達者なワケありの先輩と大学生のわたしが過ごした、珍妙でたまに切ない日々。短め連載の予定です。

## (1) いきさつは一本釣りで

「おまえ全然わかってないよ。あのね、だから愛っていうのは・・・」

今日もまた、口だけ達者なこの人の愛に関する説教もしくはゴタクがむなしくひびく。

ここは何もどこかの講堂などではない。通っている大学の近くにわたしが借りた、古びたアパートの一室である。

こんな珍妙な事態をどうしろというのか。よりによって愛についてのゴタクを、なんでこの男からくどくど聞かされているんだろう、わたしは。神様おしえて。

目の前の男に最初に出会ったのは、この男が高校二年、わたしが同じ高校の一年のときだった。

一年生のとき、わたしはクラスを代表して文化祭の実行委員になった。別に積極的な性格だったというわけではない。クラスに希望者がいなくてくじ引きになり、四十分の一の確率のそれを引き当ててしまったのだ。

そう、昔からやかいかいごとを引っ張ってくる素質があったのだろう、と今に思う。

文化祭実行委員は、会長をはじめとする生徒会役員や執行部の指示を仰ぎつつ活動する。当時、生徒会の副会長だったのがこの男なのだ。

ちなみに、生徒会役員は選挙で選ばれるが、生徒会執行部員は、自薦他薦に話し合いというあいまいな基準で選出され、人数もその年によって違う。というか、一般の生徒にとって、誰が執行部員を務めているかなんてことは、意識せずに済む話である。

その上、執行部員のほとんどが、生徒会役員によって文化祭実行委員の中から一本釣りされてくるなんてことは、ほとんどの人が知らないはずだ。わたしも知らなかった。

そしてわたしは、二年生のときは文化祭実行委員にはならずじ済んだ、かわりに、生徒会執行部に所属するはめになった。一本釣りされてしまったのである。

要は、文化祭実行委員と生徒会役員の接触が多い文化祭の準備期間中に、使い物になりそうな人間に役員が目星をつけるのだ。

この場合、使い物になりそうな人間というのは、何か指示を与えられるとそれをやらずにいられない、という人種で、カリスマ性やリーダーシップはもちろん不要だ。要領はいい方がいいのだろうが、要領がよければうまうまと釣られることもないわけだから、自然と要領の悪い人間が多くなる。事実、その学年の執行部員は女子はわたしだけだったが、男子は見事に全員、人のよさそうなタイプだった。

この男はわたしが二年、本人が三年のときも連続して副会長を務めた。三年になるときは会長に立候補するのではと思われていたが、会長に立候補して見事その座を射止めたのは、前年この男と同じく副会長を務めていた女子の先輩だった。

この人を仮に姫川先輩としておこう。姫川先輩は、凜とした雰囲気をもとった美人だった。優秀な人でもあったが、やや人見知りのところもあり、あまり人の上に立つのは得意ではなさそうだった。

だから姫川先輩が生徒会長だった期間、実質的にその役割を担い、影に日向に会長を支えたのは、この男だった。

そういう性格の姫川先輩がなんだってまた生徒会長に立候補なんてしたのかというと、先代の生徒会長の強力なプッシュ説が有力で、多分正解でもある。先代会長を仮に速水先輩としておく。速水先輩は姫川先輩のさらに一つ上の学年、つまりわたしが一年のときの三年生だった。

この姫川先輩と速水先輩というのが、後々語り継がれるような美

男美女、成績優秀カップルで、「お互いを高めあうおつきあい」をしているとかで、教師からも公認のお墨付きをもらうような間柄だった。速水先輩の卒業後も、もちろんその交際は続いていた。

速水先輩が姫川先輩を推したのは、その人見知りを克服させるため、というのが専らの噂だった。他に適役の立候補者もないとなれば、一般の生徒としても美人を会長にかかげるのはやぶさかではない。ということで、賛成圧倒的多数で彼女が会長に選出された。

凜とした美人で成績優秀、しかし実は人見知り。最強である。

速水先輩は、この男（もう面倒なので便宜上、北島先輩と呼ばせていただく）、北島先輩が会長職をうまくサポートするだろう、というところまで見切っていたはずだ。

北島先輩が姫川先輩に叶わぬ思いを寄せていたということまで、速水先輩が知っていたかどうかは定かでない。でも、案外知っていたのかもしれないと思う。

そう、北島先輩は姫川先輩が好きだとか、姫川先輩に振られた、とかいう噂が、ひそかにささやかれていた。当の北島先輩は、そんな噂を気にする様子もなく、副会長の仕事ぶりにも私情をはさむ様子は見られなかった。だから、それは根も葉もない噂だという人もいた。

でも、北島先輩が姫川先輩を好きだったというのは事実だとわたしは知っている。

だってわたしは見てたから。ずっと北島先輩を目で追ってたから。

だから、好きだという噂は本当でも、振られたという噂は嘘だということも知っている。もし実際に思いを伝えていれば、まず振られただろうと思うけど、それができるほどの度胸はない人だった、この男は。

昔からずっと、北島先輩は意気地無しで弱虫で卑怯だった。

そういうわたしも、高校時代には自分の思いを伝えることができ

なかった。

しかし、大学生になってから、わたしはきっちり北島先輩に思いをぶつけようとした。えらい。よくやった。自分を褒めたい。

ただしその長年の思いは玉砕した。それも先輩得意の逃げの戦法によって。

たくさん泣いて、体重も一か月ほどの間に5キロぐらい減った。そして、少しずつでも、ふっ切れるように頑張ろう、ダイエットばんざい、最近ようやくそう思えないこともないようになってきた。それがどうなんだ、今になってこの事態。

## (2) 金魚のこと

そもそも、大都大学最難関の法学部の入試を突破した北島先輩を追いかけて、わたしは同じ大学に入学したのだった。法学部は成績的に無理だったし興味もなかったので、文学部で。

こんな男を追いかけて大学まで決めてしまうとは、なんて浅はかな若気の至りか。後悔しきり、ふんどりけったりだ。家計だって楽ではなかったのだから、地元の専門学校や短大、あるいは就職という道を探るべきだったし、実際この男に出会わなければ、そうなっていただろう。

執行部員時代のわたしは、よく働くコマとして、この男にわりと目を掛けられていた。

わたしが何のために、ムキになって執行部の仕事や、さかのぼって文化祭実行委員の仕事ごときをこなしていたかなんて、気付くような甲斐性はもちろん先輩にはない。あんなに尻尾を振って、従順な犬みたいに、いつもその姿を探していたわたしの気持ちなんて、先輩にとっては、道に落ちてるアイスの棒みたいなもの。

それでも、大学入学が決まったときに恐る恐る連絡をとってみると、昔のよしみで喜んでくれ、その後はときどき、食費にも事欠くわたしを食事にさそってくれるようになった。

あわよくば同じサークルに、と思っていたが、司法試験を受ける予定という先輩が入っていたのは法学研究会とかいうお堅いサークルで、わたしなんかはお呼びじゃなかった。

だからその場所が色気も何もなく、女子学生の姿すら珍しいような安っぽい定食屋や居酒屋ばかりであっても、いつだって食事が済むとハイ、サヨナラという素っ気なさであっても、おごってもらいばかりの気まずさがあっても、わたしは先輩に会えるその時間のた

めに、大学に籍を置いているようなものだった。

その食事にしたって、いつでも先輩と二人きりというわけではなく、先輩の友人の男子学生が何人か一緒のことも多かった。そうだろうが何だろうが、誘われればいつだって、ホイホイとついていった。

アジフライ定食なんかを食べながら、先輩は得意げに教授秘書やなんかをとうとうと披露する。二人だけのときは、高校時代の思い出話が出ることもある。でも不自然なほどに、姫川先輩や速水先輩の話題は避けられていた。

相変わらずよくしゃべる人だ、やはり弁護士なんかには向いてるのだろうか、でも実は気弱な性格が露見して、費用を踏み倒されたりするんじゃないだろうか、などなど思いつつ、だいたいにおいてわたしも呑気に話を聞いていた。

もうこのままの関係で十分幸せじゃないか、そう思い始めた頃。

先輩周辺に一人の女子学生の姿が見られるようになった。

それまで大学では、先輩のまわりに女の人の気配を感じもしなかった。だから気にしてなかったけど、考えてみれば、その意気地無しで弱虫で卑怯な本質がバレなければ、けっこうもてるはずの外見はしている。おまけに口だけは達者だ。

もしくはごく稀に、例えばわたしみたいに、意気地無しで弱虫で卑怯でもまあいいか、と思う人もいるかもしれない。

この女子学生の名を、仮に月影さんとしておこう。月影さんは、悪いことに、姫川先輩と雰囲気似ていた。姫川先輩よりだいぶ明るく積極的な感じはするが、立ち姿なんかがよく似ている。

北島先輩に話しかけるその姿を一目見たときから、わたしは今までの心地よい関係はもう終わるのだ、ということ悟った。

どの道、心地よいけどこんな嘘っぽい関係はいつか終わると、はっきりしていたはずだ。だからいっそ、月影さんに感謝してもいいしないけど。



月影さんは先輩と同じ法学部で、学年はわたしと同じ一年生だったが、それまでその存在を知らなかった。多分行動範囲があまり重ならないのだろう。もし見た事があれば、すぐ気付いたはずだ、先輩に会わせたくない人だと。

わたしは二人が親密になっていく様子を、ただ黙って見ていた。先輩からの食事の誘いは以前同様にあったし、わたしも何食わぬ顔をしてついていった。その席で本人から月影さんの話題がでることはなかった。でも他の男子学生がからかう様子から、月影さんが熱心に働きかけてそろそろ王手をかける寸前、先輩がのりくらりと対応していることが見て取れた。

もう、はっきりしてくださいよ先輩。蛇の生殺しはやめてよ。自分のことを棚に上げ、わたしはまったく自分勝手に、先輩の相変わらずの煮え切らなさに苛立った。

さすがにもう無理だ・・・そう思ったのは、アパートの小さな水槽で腹を上にして浮いていた金魚に気がついたときだった。

この金魚は唯一、わたしが先輩からもらったものだった。

あるとき二人で食事をした後、店を出たところで小学生らしき女の子に話しかけられた。どこぞで金魚すくいをしたらしく、金魚が一匹入ったビニール袋を持っていた。家では飼えないからお兄さんどうにかしてくれと、初対面のその子がいう。

それを先輩がにっこり笑って受け取り、その後で結局わたしに下賜されたというわけだ。そう、もらったというより、押しつけられたといった方が正しい。

でも、これあげるよ、大事に飼ってよと、先輩が言ったのだ。わたしがもらわないわけじゃないか。

それから慌てて金魚の飼い方やえさのやり方をネットで調べ、思った以上に弱い生き物であることを知り、それこそ大切に飼っていた。人には言えないが、夜には主に先輩に関する話題で、話しかけたりなんかしたりして。

その金魚を死なせてしまった。いつから餌をやっていなかったか覚えていない。昨日今日死んだのではないかもしれない。それにすぐ気付かないくらい、わたしは心がおろそかになっていた。北島先輩と月影さんの姿ばかりが頭に浮かんで。

大学には、数は多くないが信頼できる友人もいる。友人もその頃には、顔色が悪いと心配してくれていた。

友人の一人、ここでは仮に美奈と呼ばせてもらおう、美奈には、わたしが高校時代からずっと、先輩に思いを寄せていることも、先輩の豆腐の角みたいな性格も、話してあった。だが、月影さんのことまでは話してなかった。

ただ、わたしが知らなかっただけで月影さんは学内にファンクラブがあるほど有名な人だったらしいので、わたしの落ち込みを見た美奈も状況を察していたかもしれない。

## キタジマ先輩の奇矯な高校時代（閑話）

うむ。これはいい。やはり正面に座って見るのが一番だ。

いや、ほんとに。この子が必死な感じで書いては考え、書いては考えする様子は、猫が無心に前足を舐める様子にも似て、愛らしいな。

「おい、ちょっと待て。ここを見なおしてみろ」

このように親切に指導することによって、この子のオレに対する尊敬の念も、いやがうえにも増すに違いない。

後輩のこの子・・・仮にムラサキちゃんとしておこう、ムラサキは、生徒会副会長であるこのオレが、職権を正当に濫用し、文化祭実行委員の中から生徒会執行部に一本釣りしてきた子である。

職権濫用を更に進めれば、執行部員をオール女子で固めることもできなくはなかったが、現二年のムラサキの学年では、女子はこの子だけである。

執行部員は、文化祭前などは学校側に内緒で泊まり込み作業、なんてことになるため、正直言って男子の方が扱いやすい。それに、美人生徒会長と噂の姫川が、女子にいじめられた経験でもあるのか、執行部に女子が多いのを嫌がったという事情もあったのだ、残念ながら。

いうまでもなく、オオカミの群れの中に羊を一匹放り込むようなヘマをするオレではない。ムラサキ以外の執行部員男子の人は、人畜無害なタイプであるかどうかを選定基準とした。これらのボンクラ男子諸君には、オレの卒業後も手下として、ムラサキの情報を流してもらう所存だ。

と、まあ、ここまではよかったが。問題はこの子が若干、鈍いということである。

オレがこれだけアピールしているにも関わらず、この魅力のすべてが伝わっているかどうかは、はなはだ心もとない。先代の生徒会長、速水先輩なんかは、「おまえは考え方がジジむさいし変態だ」などと失礼なことを言っていたが、こう見えて、体育祭なんかでは黄色い声援が飛んだりするのだ、ムラサキ以外の声帯からは。

もうちょっとこう、「せんぱあーい、ムラサキ、おべんと作って来たから食べてね？」みたいな展開にならないものか。

これまでのところ、いつだって先に話しかけるのはオレの方だ。

「先輩、聞いてますか。これでどうでしょうか」

まったく、ボケるにはまだ早いんじゃないですか、というようなつぶやきが聞こえたのは気のせいだろう。

「うむ、うまく修正できている。いいだろう」

そう言うと、ムラサキはほんのわずか、ふくれつらをしてジト目にらむようにオレを見た。

うむ。いい。この顔はいい。

これで今夜もばっちりだ。

さて。

次なる指導を熱心に行おうと身構えていたオレの情熱に気付かず、ムラサキは「これ会長に提出してきます」と、書類を手に立ちあがってしまった。

ムラサキは、生徒会長の姫川に何やら憧れをいだいているようである。まあ、姫川は美人だし成績も優秀だが、ムラサキとはまったく違うタイプだし、憧れてもしようがあるまい。

だからオレこそが、ムラサキにムラサキ本人が持つ魅力をわからせてやる必要があるのだ。

立ちあがったムラサキに、慌てて声をかけた。

「ムラサキは、猫みたいだね」

相当な勇気を動員してこのように褒めてやったところ、ゴミ箱のフタを見るような目で見られてしまった。

「わたしはどっちかっていうと、自分を犬だと思ってますけど」

しまった。犬派だったか。褒め方を間違えた。

そこへ当の姫川が、書類をかかえてやってきた。

「ちょっと北島君、防災面で揉めそうだから、一緒に来てくれる？」

「はいはい、ただいま参ります。じゃ、おまえ今日は、この辺であがつとけ」

ムラサキがタイミングを失って持ったままになっていた書類、それを手を出して受け取り、後ろ髪を引かれる思いを抱きつつ、姫川にしたがって歩きだした。

ムラサキがオレを、というか姫川を、目で追っているのがわかった。

こういうとき、この子はひどく心細いような顔をするのをオレは知っている。

もしムラサキが望むなら、ずっとムラサキの隣りにいて、ムラサキの魅力について、のべつ幕なしに教えてあげるのに。あんな心臓に悪い表情はさせないのに。

でも、望まれてないんだよなあ、オレ。ゴミ箱のフタだもんなあ、オレ。

先代の生徒会長、速水が卒業するまでは、ムラサキが目で追っていたのは、姫川でなく、むしろその彼氏である速水の方だった。まあ二人いっしょにいることが多かったから、両方を視界に入れてヤキモキしていたのだろうが。

速水・・・、あれはあんな顔して、悪魔のようなヤツだ。惚れて

はいかんと、何度注意しようと思ったことか。

あれは去年、まだムラサキが初々しい一年で文化祭実行委員、速水が三年で生徒会長、オレと姫川が二年で副会長を務めていた頃のことだ。

放課後、たまたまムラサキと鉢合わせしたので、その機会を的確にとらえ、副会長としての自分の凄さをアピールしてみた。このとき既に、ムラサキはかなり気になる存在になっていたのだが、ムラサキの方からは特に反応が返って来なかった。しかたなく、「気をつけて帰るたまえ」と、さわやかな先輩ぶりを見せつけてから、リリースした。

ふと気がつくと、ハンカチが落ちていた。

うむ。ムラサキのものであろう。

いくら二次元がもてはやされる昨今であっても、もちろん、ここでの匂いがかがなければ、高校生男子として変態である。

というわけでハンカチを拾い上げて堪能していた。ところを、速水に目撃された。

悪魔のような速水は、それを他言しない代わりに、自分の卒業後も含めて今後、姫川の虫よけとして完璧に機能すること、次期生徒会長として立候補するはずの姫川の仕事をサポートすること、この二点をオレに約束させたのである。

うむ。まあこれも、青春というヤツであろう。こうして幾多の苦い経験を積みながら、オレはますます素晴らしい人間に成長していくのである。

だから待っててね、ムラサキちゃん。



### **(3) 木っ端が微塵(前書き)**

読んでくださった方、お気に入り登録してくださった方、  
ほんとにありがとうございます。

とても励まされます。

まだいろいろな機能をなかなか使いこなせていないので、  
失礼があったらすいません。

それから、アルファポリスに登録しました。

引き続きどうぞよろしく願います。。。

「閑話」の前、(2)からの続きです。



### (3) 木っ端が微塵

ごめんねごめんねと泣きながら、死んだ金魚を夜の公園に埋め、わたしはいよいよ決心した。長年の思いを伝えて、決着をつけようと。

そこでわたしはない智恵をしぼって、先輩がごまかせない方法を考えて。間近にせまったわたしの誕生日、その日に会ってくれと先輩に頼んだのだ。

何の因果か、月影さんとわたしは誕生日が同じだった。それを知った時には、なんともいえない気持ちになった。なんでこの人と自分が同じ誕生日なのかと。

それでも、大学も同じ、好きになった人も（多分）同じ、ということは、運命だったのだろうか。立ち位置はだいぶ違うのに。だとしたら、なんだか嫌な運命だ。

断られたら、すっぱりあきらめて、新たに楽しい青春を謳歌しよう。わたしはそんな風に考えて、自分を励ました。そんなきれいごとであるわけないのに。

わたしは人を試すような、嫌な嫌な人間になってしまっていた。人のせいにしてごまかすような、嫌な嫌な女になってしまっていた。きつとわたしは先輩にふさわしくないのだろう。

でも、先輩のことを知るまでは、こんなに嫌な人間ではなかった。だからこれはぜんぶ、先輩のせいということにする。

あるいは先輩の胡散臭い説教のことばを借りれば、愛のせいともいう。

そして案の定、前日になって、先輩はその日会うことを断ってきた。電話一本で。それも、月影さんのことを暗示することさえなく、

急きよ実家に帰省しなければならなくなったという、腹の立つ理由をつけて。

逃げられた。体中の血液がざっと音をたてて落ちていくような感覚の中で、わたしはそう思った。

それから一週間ほどたって、実家云々の話はまあ嘘ではなかったことがわかった。あの日、先輩の父親が手術を受けることになったそうで、父親のその後の病状は安定して回復に向かっているものの、一時期は危なかったという。

その情報とともに、それまでのように二人で食事することも、もうできなくなったことがはっきりしてしまった。わたしは選ばれなかった。

そのうえ、それ以前のひと月ほどは、父親の体調が思わしくないので、大学を休学するか、最悪やめて、家業を手伝うべきかと悩んでいたらしいことも耳に入った。

そんなこと一言も聞いていなかったわたしは、木っ端微塵に吹き飛ばされた。

先輩の実家は、わたしの実家から車で三十分足らずのところにあるはずだ。高校時代の話をするついでにでも、どうして話してくれなかったのか。そんな事情を抱えて、なんでいつも、あんなに楽しそうにしていたのか。そんなにもわたしは、信用されていなかったのか。あんなに優しく笑っていたのに、どうしてこんな、残酷な仕打ちができるのか。

それが今から、ほぼ三週間まえのことだった。何かを食べる気にもならず、外出する気にもならず、ぐっすり眠ることもできず、美

奈をして「どどめ色の生活」と言わしめたそんな生活からなんとか少し浮上して、お腹がすいたり、眠くなったりするようになってきた今日この頃。

世間一般は夏休み。

わたしも以前から決めてあったバイトにせいを出し、お金稼ぎに没頭しつつある今日この頃。

くどいようだが、先輩の「せ」の字も口に出さずに、わたしが地の底からなんとか這いずりあがろうとしている今日この頃。

あの男が、先輩が、やってきたのだった。愛に関するゴタクを並べるために。

その日は朝から雨だった。そんな筈はないのだけれど、あのどどめ色の日々には毎日雨が降っていたような気がするから、それ以来、雨は大嫌いだ。

夏休み中の平日は、すでに決まっているファーストフードのバイト。基本は昼過ぎから休憩をはさんで午後七時か八時まで、ほぼ毎日。週末は週末で、単発で割のいいバイトを入れるつもりだった。とにかく忙しくしていたかった。

平日だったのでファーストフード店での接客中、珍しい客があった。

同じ学年、同じ学部の男子学生と、美奈。取っている講義がけっこう重なっているようで、その男子学生には何度か話しかけられたことがあったのだが、あいにく名前を覚えていなかった。そこで再び名前を教えてもらった。ここでは仮に小野寺君としておこう。

心配性な美奈のこと、何かのついでにバイトの様子を見に来てくれたのだろうと、そのときは思った。

バイトをあがってさて帰ろうか、と携帯を確認すると、美奈から

「ユー、もお先輩のことなんか忘れちゃいな」という某事務所社長みたいなメールが入っていて、店を出たら雨の中、小野寺君が待っていた。そういえばバイトが終わる時間を聞かれた気がする。

小野寺君いわく、わたしが小野寺君の顔を覚えていない可能性が高いので、わたしと親しい美奈に聞いてバイトのことを知り、一緒に来てもらったのだという。

そんな話を聞くと、わたしに特別な関心があるのかと思ってしまいそうだが、だまされてはいけない。何せわたしは、ある程度は親しいと思っていた人に、大学をやめるかもしれないという一大事を伏せられていた過去を持つ女だ。

おおかた美奈が、おせっかい心を起こして、小野寺君に頼みこんでくれたのだろう。

小野寺君は、まあいわゆる、ナイスなガイだ。はやりの服装に髪型、さわやかな語り口、大学で話しかけられたり姿を見たりした時も、同じような感じの女子学生に囲まれていた印象がある。

もしも世の中の人間を、月影さんタイプとわたしタイプの二つに分けるとすれば、いうまでもなく、月影さん側に属する人である。今までいろいろな心配してくれた、美奈の気遣いは心にしみて、素直にうれしい。でも正直、まだ今はこの種の気遣いはいらないし、忙しくも楽しい予定が満載な感じの小野寺君にも申し訳ない。

結局その日、小野寺君はわたしの古いアパートの近くまで雑談をしながら送ってくれて、そのままスタスタ帰っていった。

「おい、おまえ」

小野寺君の背中を見送ってから、玄関の鍵をあけたところで、忘れもしない人の声がして、それはもう、腰が抜けるほどびっくりし

た。

#### (4) そして先輩がやってきた

「おい、おまえ」

小野寺君の背中を見送ってから、玄関の鍵をあけたところで、忘れもしない人の声がして、それはもう、腰が抜けるほどびっくりした。

「先輩！」

咄嗟につかまえようとして腕を伸ばし、でもあっさりと避けられて、わたしの腕は空をきった。

「おい、おまえ。今まで、どっかの男に送ってもらってたんだろう」「会っていきなりそれですか。先輩には一切、関係ないですよね?」「まあ、そうといえばそうかもしれない。だがしかし、おまえ世間知らずだし、いろいろ忠告してあげよう」

「先輩、自分は世間知らずじゃないと思ってたんですか」

「まあ聞け。この世の男はすべからく全員、下劣な生き物だ」

おまえもな。

「家まで送るの、何か買ってやるの、飯をおごるのといったって、考えることはただ一つだ」

いっそ先輩がそうだったら、どれだけわたしは救われたことか。

「だいたいおまえは何だよ、ふらふらふらして、もつとしっかり毎日を生きろ」

「そのことば、そっくりそのままお返しします。結局何が言いたいんですか」

「いや結局ってそんな・・・つまり」

「つまり、何なんですか」

「つまり、愛というのは、執着なんだよ」

「・・・黙ってください」

わたしは思わず、手に持っていた鍵を投げつけた。

そしてその日から先輩は、この古いアパートにしばらくの間、いつくことになる。

次の日。天気は晴れ。

バイトが終わってアパートにたどりつくと、わたしは自分に言い聞かせた。

さすがにもう、先輩はいないだろう。いなくて当然なんだから、いなくてもがっかりする必要なんてない。だいたい昨日だって、言いたいことだけ言って後は知らんぷり、一体あの人はなんなのだ。

玄関の鍵をあけて中に入ると、先輩はその日も、いた。

「おまえ遅いぞ。いったいどれだけバイトすれば気が済むんだ」

「だから一切、先輩には関係ないことですよね」

「学生の本分は勉強。そう誰かが教えてくれなかったのか」

「わたし、お金がないんです。知ってますよね、成績的にも家計的にも、無理してこの大学入ったこと」

「や、それはそうかもしれないけど・・・」

「で、先輩いったい何しに来たんですか」

「だからそれは、世間知らずなおまえに、男や愛と言うものの実体を教えてあげようかと。ついでに学生の本分についての講義も追加しよう」

次の日も、その次の日も。夜バイトから帰ってきて、恐る恐るドアを開けると、先輩がいた。おかえり、なんて言ってくれるようになった。

あのどどめ色の日々はなんだったのか。

しかしだからといって、関係が進展するようなことは一切なかった。あくまで先輩と後輩。説教する人と、される人。まあ後者の関係は逆転することもままあるが。

部屋にまで押しかけてくるくせに、手も握れないのだ、この人は。それでも、出ていけと言えるかというところ、言えない。でもずっとこのままでいられるわけがない。さすがにこのことは、美奈にも相談できなかった。

「はいはい、よく聞け。つまり好きだ、惚れたと言ったって、そんなの何の意味もない」

言ってみてから、ほざきなさい。

「愛は惜しみなく奪う、と有島武郎もいつている」

「愛は惜しみなく与う、というトルストイのことばがあつての有島です」

文学部なめんな。成績は多分ギリギリだけど。

「いいから聞いとけ。愛は目に見えないから皆、幻想を抱く。しかし結局、愛とは醜いものなんだ」

「愛は行動を伴うもの、というものもありますよね。マザー・テレサですけど。先輩は行動したこと、ありますか？ ありませんよね。

わたし、勘違いしてますか？ してませんよね。何か言うこと、ありますか」

「・・・ない」

これは先輩の「愛とは攻撃」に備え、バイトの前に調べておいたもの。

どどめ色の日々より以前は、とうとうとしゃべる先輩のことばをただ聞いていることも多かったのに、反論ばかりがうまくなくて、どんどん可愛くない女になっていく。

責任とってくださいよ、ほんとに。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5988x/>

---

意気地無し先輩との珍妙な日々

2011年10月19日02時10分発行